



五十周年改革から 六十周年記念行事へ

尚友会会長

岸本 大三郎

令和五年五月に新型コロナウイルス感染症は「五類感染症」となり、それ以降は鎮静化が進んでいます。年末年始期間に未だ感染者数が増加する傾向が残っていますが、恐れていたウイルス変異等によるパンデミックの再来は発生していません。四月頃にはマスク着用されている方を結構見かけましたが新型コロナウイルス感染者はほぼゼロと激減していますので花粉症対策の方が多いいのではないかと思っています。

世界中を震撼させる大災害ではありませんでしたが、学園においても「対面授業ができない状況で日々の教育を如何に進めればよいのか」という難題に挑戦し続けた数年間であったと思います。学校行事も今ではほとんど従来通りに運営されていますが忘れてならないのはパンデミックが起ったときに教育を継続できた要因が何かを明確にしておくことが大切だと考えます。これは特に五十周年の改革で行ってきたことを、ひとつひとつ丁寧に評価して大災害に対しても堅固で品質の高い教育システムを実現することとで在校生の自立的な学習を助けることができるのではないかと考えます。

教職員の皆様、在校生の皆さんが数年間の逆境に屈することなく多くの改革や工夫により成果を上げておられることを知り、尊敬と感謝の気持ちを表したいと思います。今年の大学進学成績も医学系を主軸として素晴らしい結果を継続されており、大いに改革の成果が上がっていると感じます。皆様もどうぞ自分を信じて自己鍛錬に挑戦して頂きたいと思います。

今年のホームカミングも「学園文化祭」(九月二十八日予定)のコロナ行事として実施します。できるだけ多くの皆さんに今の金蘭千里学園の情熱とエネルギーを肌で感じて頂くことが目的です。また、昨年に続いて「尚友会 全体親睦会」を今年は十一月十四日(金)に予定しています。参加者拡大に向けて「早割」特典もあります。ご友人の皆様に「早割」をお声掛け頂き早めに申込み頂くようお願いいたします。



尚友会発会二十周年の意味

金蘭千里学園 理事長・学園長

辻本 賢

理事長室の西の壁面に、中島千波が満開の桜を描いた「般若院の枝垂れ桜」を懸けている。二〇〇五年、「金蘭会学園から金蘭千里高等・中学校を分離、独立すること」に賛成票を投じた芳友会出身理事から贈与された。諸氏は、わたくしに「金蘭」の名前を大切にし、護ることを託され、わたくしは、その願い望みを重く受け止めた。それから二十年、「般若院の枝垂れ桜」は西の壁で季節の移ろいにかかわらず満開である。

この二〇〇五年の伝えられた「金蘭」の願い望みは、わたくしに芳友会の発会を想起させる。

一九〇五年、金蘭会(現府立大手前高等学校同窓会)が自分たちの受けた教育を自分たちの手で建ちあげ、金蘭会高等女学校を創立。一九二五年、金蘭会総会は、満場一致で「金蘭会から金蘭会高等女学校を切り離すこと、新たに発足する同窓会に経営権を委譲すること、その名称はなるべく金蘭に因むこと」を決定。金蘭の蘭の花は芳友から芳友会が発会し、金蘭会高等・中学校の経営を担って一〇〇年。

二〇〇五年、金蘭千里学園が独立し金蘭千里高等・中学校を経営するとともに、独自の同窓会を、志の高い友を尚とぶ尚友から尚友会を発会させた。その思いを題字「尚友会だより」の一字一字に込めた。それは、「金蘭」を大切にしたい望みが、金蘭会から芳友会へ、芳友会から金蘭千里学園尚友会へと継承される一〇〇年の歴史である。因みに本校生の一期生から三十八期生まで六二八四名が芳友会会員で、一期生の中條富士人さんが第十一代芳友会会長を務められています。

創刊号は、尚友会発会までを時系列で紹介している。初代会長中條富士人さんは、「私たち同窓生が少しでも母校のため、そして何より現役の後輩たちのために役立てるような活動をしていきたいと考えております」と述べられ、わたくしの願いである「ホームカミングデイに、是非とも母校に帰ってきてください」と締め括られています。そして、尚友会が金蘭千里学園の経営を担い、二十年が経過しています。有難うございます。



ご挨拶

金蘭千里中学校・高等学校 校長

大中 章

皆様、日頃よりお力添えをいただき誠に有難うございます。本校は毎朝の二十分テストや、一クラス約三十人の少人数教育など創立以来の伝統を守りつつ、創立五十周年改革で、新制服の制定、クラブの大幅増設、文化祭・体育祭の充実、キャンプ・自然研修の充実、生徒による学習記録の習慣化など大きな改革を実行し、その後も学校のICT化、各種プレゼンテーション大会への参加など、新たなチャレンジを続けてきました。そして、本校での教育活動を通して、自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、自ら行動する、すなわち自律する力を身に付けて欲しいと願っています。

この度迎える創立六十周年では、さらなる多様性の時代に調和しながら、個性、自律性、そして社会性を磨く教育を進めていきたいと考えています。具体的には、昨年度より中三・高一対象の英数習熟度別講座編成に代わるアダプティブラーニングを、また、指導のレベルを定めた新たな生活指導方針である金蘭千里五則を、そして、①ウィンターキャンプ(スキー・スノーボード合宿)、②プログラミングキャンプ、③英語漬けプログラム、④登校自習、⑤家庭で過ごす、の5つの選択肢の中から選択する形となった新しいウィンターコースを実施し、今のところ上手く機能しているように感じられます。

今年度も、五月から六月にかけての中一・中二・高一・高三のキャンプ活動、中三・高二の信州と北海道での自然研修も、自然を十分に満喫し、無事終了することができました。七月下旬から英国研修が、イートン校・ロウ校で実施されます。

昨今、学校説明会への参加者数の安定が中学入試の受験者数の安定に繋がっていることは有難いことだと思えます。今後も、教科指導、生活指導、進路指導の全てにおいて目の前の生徒を大切に、一人一人に寄り添っていくという本校の基本的な姿勢を着実に実践していくことが肝要であると考えています。